

河海鈔 第十

東屋

卷世三

字母

卷世四

精於

卷世五

多學

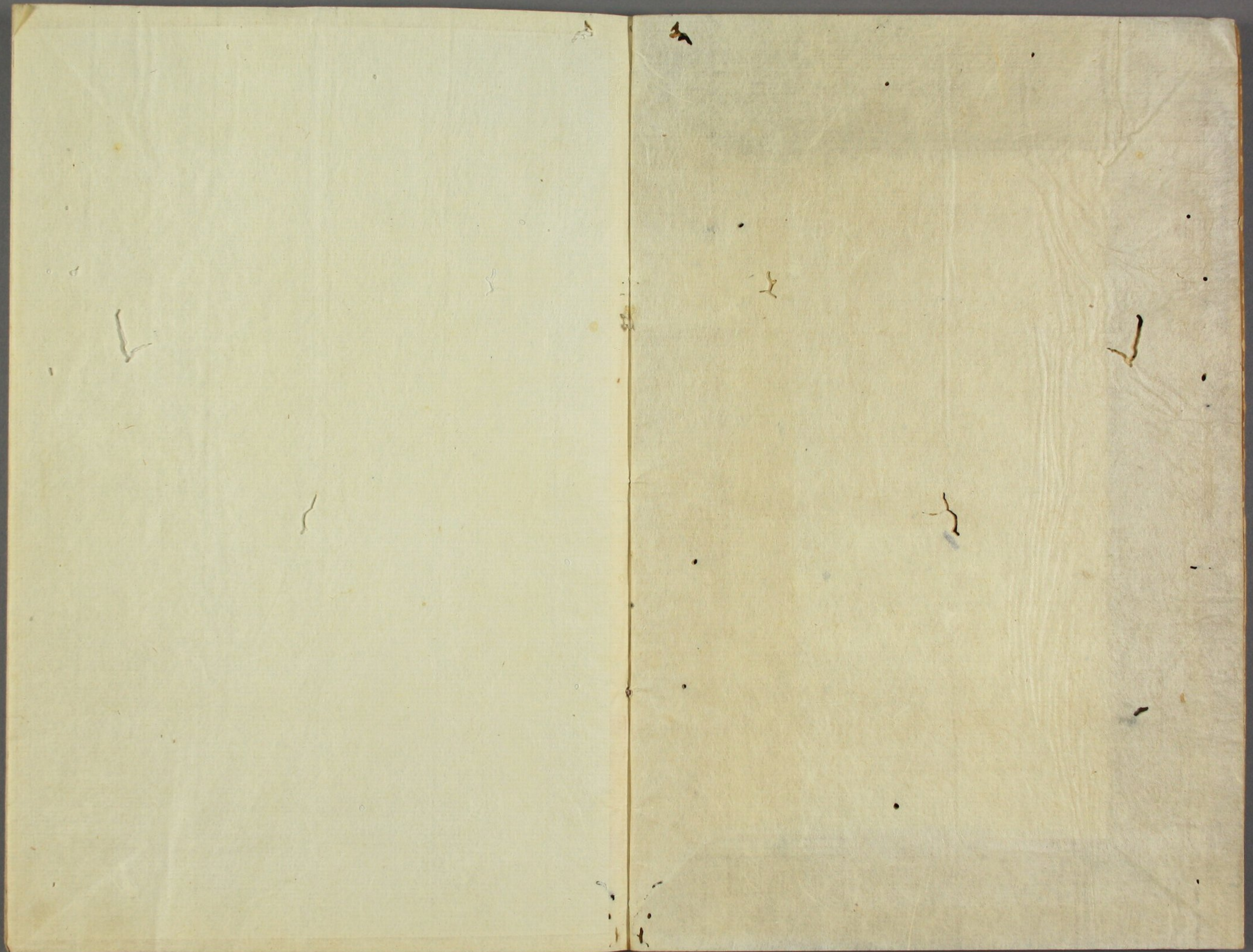
卷世六

算字格

卷世七

四





河海抄卷第十九

正六位上物部博士源惟良撰

第六 東屋 四阿 二や屋上六雨マト云り卷名

ほくしんをまけみまきりしんちりあき

サシトムル 津ヤシケキ棟屋  
アノリホトツルソノキカ棟屋  
筑波山端山シケ山シケシド  
思入ニハサハラサリヤリ

このころいしとハ 守子共是ハ常陸介也 守ハ親王諸王任之  
太守ト云仍ハ守代トシテ國務ヲ行故ニムク守ト云歟亦凡  
任スル時ハ太守唯守ニ任スル例セアルナリ 常陸上野兩國ノ外  
親王不任諸王ハ宮達ノ御事也

そぞくくにあふ人ありれば 次々歟 ナトツ同五音ニ  
或ハ過々

おめがこをかりとてそら 同子也

さましくにをりて 賦

とくゆめをり 徳

こところいしたるも 好事者慕以錢帛ヲ 孝鍾



河内文庫

まきしづかみくらやうめそ

豪家

近

白氏文集十四村居寄張衡詩  
生涯渡落性靈迂

こししむまくらを公物代りせんかじ

腰折 哥合

物語合 庚申

まらち思らてん

蔭繪螺鈿

ゆをまらぶふさういづるびりめそ

ウツモル心ナリ

かいきうごころわたりよりしんもつあひれをひらめれば  
師をばらるるごとくそよらじゆくをともるのほひりめそ

内教坊 大宿傍の裏書云 曲

内教坊 大内殿舎名也 大内ハ大内裏

ふるりうらりころこの物かをしんそしと

万秋樂ニ内教坊

説ト云イアリ然ハハヤリカカ曲ノ物トハ五六帖ノ事歟

孝行 説十三學得琵琶成名ハ屬教坊第一節ニ琵琶引

内教坊ヨリ琵琶師ノ迎先和漢之古事有甚心歟

あこころを思はしめんとしうらみなり

吾子 日本記 我子

阿子 家子

あうくくあんと云云 シカシカイフ 日本記ニ

かろむのぬし乃 守主也何ノ主ト云ハ聊カシウク詞也大鏡ニモ

ナニガシノ主ノ藏人ニテイニスカリシヤト多アリ

こつろかほりばらり 専

東屋君也

うらちのり方

内房ノ心也

てらこけけいごてく 如捧子 掌上珠ト云歟

高家子 掌子ハタナコト

いづられおのやむじとあこむいそそたすひはんをいほ  
いづらむせむとつとさされほらうりもほんあふまひ

ホトリハミトハフレハミタ心ナリ

まらち思らてん 後ノ守カ詞ニ此比在トクナド心モトナカレハナクノ多ニヒトアリ

はよりタラフト云歟 後ノ守カ詞ニ此比在トクナド心モトナカレハナクノ多ニヒトアリ

かそんあがさうあそとみといふあういさひみり 真人 諸大夫也

わろきりあまきりつ  
らいつしん位下加  
いづものいづらづいづら  
コテタハハコチ  
ひあびる守  
大徳のいづらづいづら  
かこころいり  
あこころいり  
えいせうせ  
あふかく  
たかた  
一りし  
うらま  
あま

本ノ位  
今度 日本  
二六藏人

コテタハハコチ  
ひあびる守  
大徳のいづらづいづら  
かこころいり  
あこころいり  
えいせうせ  
あふかく  
たかた  
一りし  
うらま  
あま

新様樂記云

あこころいり  
えいせうせ  
あふかく  
たかた  
一りし  
うらま  
あま

十一君気装人  
十二君假相人

甲或要

あふかく  
たかた  
一りし  
うらま  
あま

世中の昔ヨリヤハウカリケシ  
我身ヒトツノタニナルカ

オホカメノ我身ヒトツノ長カラニ  
ナレノセラモウラニカナ

薩波山ハ山シケ山シケレド

いも木ありぬ  
みしん  
ひん  
は  
あま

人形 祭祀具 一撫 一照トアリ

大幣ノ引キ  
思ハトエヨク  
大幣ト各ニコソタテ  
ヒコホシニ

あまの川を  
よりわ  
ひん  
は  
あま

ワキモ子カ来ハ  
リモムワシキユカリト思ハ

あまの川を  
よりわ  
ひん  
は  
あま

若者又聞是  
口中常出青蓮華香  
身毛孔中常出牛頭  
檀之香

とらぬのびるえがらんたまひまで

トフ鳥ノコエモキユエ又奥山ノ  
フカキ心ヲ人ハシラヤン

数々のぬき物さひたひもやいづまうせつらん

數ナラヌ身ハ思ヒナカカ  
人ナミハニ又ハ袖カナ

今ハヒテワスル、草ノ種ヲタニ  
人ノ心ニカセヌモカナ

かふらぬかきでしうらむしきほし

思ハヒトタラヌコトモ有物ヲ  
ナキ名ハ立テタニワスレ子

こころやうせめをへてたてしう

本條

びりぶのうらりまこめさる

屏凡納袋事今イタク並事ニマ

上吉ヲ事欣亦田舎ニ先牀也

まろりふちをだんごくめ

物ヲシキケシキヲ云心

つんこしき

見事ニ至極シク心ノ着殺ナト作同心

かたのれとこもむまのかりん

オソニシキニソトス同音

かまらりこま

降魔相

うつしむまも

鞍置馬也

ゆせろりかごうふらぬらちをわすれし

洗髮後首

風發 左傳曰絳以沐謂僕人曰沐則止

めまごぼろりこま

道理承

瞬也

いりぞうしとむらんまづらぐし

心ハナク行水ノワキカ  
イハテ思イフニサレハ

思事イハテツタニマニ又ヘキ  
我トヒトシキ人シナケルハ

えあもあひてもあをぬやうらむらみづみうらむら

フスホトモ無テ明々夏ノ夜ハ逢テモフハ又心ヲウラヒ

いはらりゆらんらしゆねごうらぬねね

イタキノニカケト云コト歎 譬ハオホツカチキニマ中君ノ返りニモ  
ウシロメタゲニケキハミタレハニカケコソトアリ

たがさふれほいみまかまゆら

かこりゆらゆらしかりしまらいかみりかきそとふえと

ゆらんこころあそびもあかしつまつまづらひか

をかんし 八宮ノ浮舟君ヲ我子ト云ヒ給ハサリシ

其方ナラテオホシハナツニシキトハ中君ノ母義ト常陸カ

妻トシタシキ

がうししに

曹司々々也

もろくはまのあしひきのあつとせし  
左方音 万葉ニ  
こゝろふかやうとまねたせむとて  
ウツロシコトタニキ秋萩ヲカレカリモヲケツツ哉

宮城野ノ小萩ヲカレカリモヲケツツ哉  
カ下宮ノ子トシラニシカハトソテイハル也

あつとせし  
師説如此但惣有白と志猶可了見  
清子也

あぬとらん  
世中ニツラヌ所モエテニ哉年フリニ允貌カクナム  
迷 放埒

あつとせし  
僧坊具 難舊

あつとせし  
愛宕聖者空也上人事彼縁起曰空也聖人於清水寺ニ誓言

願曰念佛行所何所ニテカ慈尊之出世ニ至迄相續之靈地ニハ  
キト祈念セラセラニ觀音告給愛宕山月輪寺ハ是補陀落山ニ  
同淨土也魔界断跡聖衆影向之所也於彼所此行ヲ可始之  
由有夢想仍彼山而多年練行其後於洛中念佛行ヲ弘通  
諸人ヲ被為度ト云々 三代拾僧正真濟 空海大師ニ從テ真言  
傳愛宕高雄二十二年任ケルト云云

あつとせし  
衆生每邊誓願度 四弘誓願之隨一也  
煩惱每邊誓願断 每上菩提誓願知

あつとせし  
伊賀部女 中媒也狐ニヨリ  
赤宮寮部女 是狐事  
一説伊賀伊勢國ニハ白狐ヲタウメ  
媛 媛 漢語抄イカタウメ  
赤宮寮部女 是狐事  
一説伊賀伊勢國ニハ白狐ヲタウメ

御前ト云ト云 新様樂記云野干坂之伊賀專之界  
条專 今俗喚老女為專 漢語抄 私ニ云ク、ツトテ  
カシキノウナ九女ノト云

かほろぬろしくい 牛飼 應神天皇之御時始ト云

家、取已也 秦始皇本記註曰西京賦曰微道外周千廬内  
傳 薛綜曰士傳宮外向為廬舍畫則巡行非常之夜行別致  
不虞也 源順夜行奇有夕顏卷ヤカハ家也家ノ字ヲカト  
ヨム也万葉三中納言家持共云リヤカハキモトイフ毎ノ婦コハ  
伊勢物語云門ヨリモエイラテ 童ノフミアケタルツイチノクシヨ  
リカヨヒケリ 古今ニハカキノクツレトアリ

ことしも 淨法人之

こらしきりみいすもあゆみけりごとくらぎきひて  
クシクモ降来而カニ掃カ崎佐野ノ渡リニ家モアラナクニ  
ゆいしらむじぐらとばらふたの解りゆるあがくこらふ

四阿 今新様 阿屋 順和名 四屋 上阿 東屋 催馬樂 唐令云

宮殿皆四阿 辨色立成云阿 同今云 庶人川舎不得過二門  
阿都万夜東屋而下 辨色立成云雨下麻夜也

むだのたらしきりみいすもあゆみけりごとくらぎきひて  
ねほりれしきりみいすもあゆみけりごとくらぎきひて 濁也  
トニカクニ物ハ思ハスヒクタクニ  
ウツスミハハ只一ノ申ニ

飛蓬轉知車作トアリ蓬葉ノ如車輪元元ケラミラ車ラハ作り  
始シ仍蓬ト車心ニ云歟一口子シチノ一口子ノ心歟 異本云

淮南子曰見教蓬轉而知為車文亦曰太平御覽云秋蓬  
獨何華聽隨隨風轉者車名也云 私云唯草ノ菴  
ナトノ旅寝ノ九子ナリ

かが月のあやとをむらふとげしり 節分  
ほろろしりしりしり

うそとれほそかごと 車れあふり 法性寺  
車中ニ引物ヲシテ貴賤同車スルナリ



道惡所云也或云自高至早車ノ輪事

わが... 我意ハハナシキ空ニニチ又ラシ

わが... 思マレトモ行方ノナキ

不要 不用

かた... 死魂

アロレカツ ハツニヤニヤアコリノアニツキカスカイモトサシモアラハコソ  
ワタチヌシエソトヒラセソトヲロレサニメヲシテキニワレマ

人ツニ催馬系 東屋律

その... 班女國中秋扇也楚王臺上夜琴聲

班女國中秋扇也楚王臺上夜琴聲 順

こ... 山里ハ物ノサレシキ一ツアリ  
世ノ憂ヨリハスニヨカリ先

以前ノ卷ニマトリキト思出スハコノ本ト有シイヲ思出テヨナリ

第卅四 浮舟

橋ノユシニ色ハカラシラ  
エノ浮舟ヲ行庶シラヌ

物の... 愛ニモ何白ラセ詠人ノ物イヒサカニクキ世ニ

神の... 志ニハ来テモヨクヤル神ノイハレ道ナラナニ

つ... 立文ノみ

大史殿ハト意殿ノ字ヲオトト讀ム

わ... 持統天皇三年二月天皇朝万國千前殿ニ卯

大學寮獻杖八十枚ヲ 年行事云二月上ノ卯日御杖事

當節會混諸司奏付内侍所江次茅四春宮被獻卯杖大進着

腋陣付藏人進之次大舍人進卯杖六十束一次急所進卯杖

女急所進式 者可居和欵其料急卯杖御机担并縫覆敷断十兩二分參川糸

結組断七兩二分 丹波糸 已上申請細殿藏人取之結付尽津張

懸角柱制立細木為柱 未出五尺許

また... へたる枝

板極 方言曰河東謂樹枝曰板極砂鷄ニ音 和名末太布利

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

内裡ニテ祝詩ヲ作シ 清和天皇貞觀二年正月十六日車駕  
幸豊樂院親賭射内射事 仁徳天皇十二年七月高麗國  
貢鐵楯鐵的八月集群臣及百寮令射高麗所獻之鐵楯的  
諸人不能射通臣祖盾人宿祢射鐵的通馬時高麗客等見  
畏其射天智天皇九年正月詔士大夫等大射宮内  
延表二年三月廿二日同十七年三月廿日同廿二年三月九日延長  
四年三月六日有殿上賭方之由見清記

親族

憲ニシテ後ハ行ヒコトケル日ノ夕メコト人ハニシクホシトシ

勅事 勅當りん

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共  
乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共  
乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

繪之事

六六

漢書霍光傳曰寵姬鉤弋趙婕妤有男武帝心欲以為嗣

命大臣輔之察群臣唯光 字子孟 任太重可屬社稷

上廼使黃門畫者畫周公負成王朝諸侯以賜光 師古音其門之署職

百物在焉故亦有畫工 繪事後素 論語 任親近以供天子

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

乃のふこの由ありとて 賭方二月十八日 年始ニ文人博士共

覆故見月輪缺 亦每月朔日月宿事藏經說正月一日  
室二月奎三月胃四華五參六鬼七張八角  
九戌十心十一牛十二虛

閑居賦張讀 卷之七 曉寺僧釋 雨之霽初寒江鷺立 重疊煙嵐之斷所

洲崎ニ立テ鷺ト書ル本モアリ 誠ニ此句ノ心ニヨラハ尤可然歟

能因奇枕ニモ鳥ヲカサキト云トアリ 鳥鵲一様相然 然而和漢ノ志

カヨハニテイハモイ多非難歟如何亦タニ、サキト有本アリハ可用之歟

あつらひぬまのりたり 出テイハ誰カ別トノ難カラレ有シニサレ今日ハカサニモ

やもあらわのりとも 春ノ夜ノヤミハアヤナシ梅ノ子、

こほりかきこころいもやとよぎ 海ノも

サムエロニ衣片あつこモマワレヲ待テ之宇治ノハニモ

こもらん人を 本人 吉人万葉ニ

たら花のこほりやとほりひさびさ 一とらひらと

今モカモ吹白之橋ノ 小島ノ崎ノ山吹ノ花 万葉ニ橋島亦小島ノクニハナトヨリ

此所ハ皇子尊ノ在所也奇枕ニ河内國トアリ如何但七瀬

後所ニ大島橋小島山城國ト註セリ

わらふもとせあし ウチノ くらがらくふ イヌカニトコノ山ニイサマ川

まきとあぬし 真人主也

うらとせしとてさるる 晴ル夜ノ星カ川也ノ螢カモ

山いづとをうけけらぬ ワカスム方ノクニノタカカ

こころのめとむ 山城ノ小幡ノ里ニ馬ハアレト

あや カケヨリノユク君ヲ思ヒ兼 ざら カ子テワニユル君カキトセハ

こころ シヒラウハモノイトコニ分明ナリ せ シヒラウハモノイトコニ分明ナリ

う 根テモ泣テモイハシ方ヲナキ 鏡ニニスルカケナラフスシテ

あ 根テモ泣テモイハシ方ヲナキ 鏡ニニスルカケナラフスシテ

あ 根テモ泣テモイハシ方ヲナキ 鏡ニニスルカケナラフスシテ

あ 根テモ泣テモイハシ方ヲナキ 鏡ニニスルカケナラフスシテ

あ 根テモ泣テモイハシ方ヲナキ 鏡ニニスルカケナラフスシテ

あ 根テモ泣テモイハシ方ヲナキ 鏡ニニスルカケナラフスシテ

あ 根テモ泣テモイハシ方ヲナキ 鏡ニニスルカケナラフスシテ

あ 根テモ泣テモイハシ方ヲナキ 鏡ニニスルカケナラフスシテ

あ 根テモ泣テモイハシ方ヲナキ 鏡ニニスルカケナラフスシテ

あ 根テモ泣テモイハシ方ヲナキ 鏡ニニスルカケナラフスシテ

あ 根テモ泣テモイハシ方ヲナキ 鏡ニニスルカケナラフスシテ

ほらうごしをきしるぬれぬまの 射ニ思ヒオセハストヒカケ

さうさうあつあつ 口ニ身ヲ浮草ノ根ヲ絶テ誘水ヲクハナイナリ思フ

口あつあつ 白雲ノ八重立山ノ嶺ニ任スミセニコト有クシ

白雲ノ八重立山ニ麓トモ思フハタツチサラメヤ

みささし 志セシトミタラシ川ニセシコトキ

たりふのこ 見知乃久知太今不乃古不尔

和礼波安火利止 也尔万宇志太也古吕安火比ノカセ

也左支每太安知也 催る糸道口律

いふたに 浦尻ニ靡ニケリナ里ノ海ノタクモヲ煙心ヨワサニ

浦尻ニ靡ニケリナ里ノ海ノタクモヲ煙心ヨワサニ

かの内記 上官ハ被官被官成也上官ハ宛字ニ書来ん

上官ハ被官被官成也上官ハ宛字ニ書来ん

この 曹司 府曹司也

この 具 一具ノ心

い 木洞 一類也

死

う 内令入

か 忠臣不仕ニ君 貞女不更ニ夫 史記ニ

や 如松 非常人

さ 恐キ山鼻ト云

ふ 世俗言アルナリ

これ 皆代官

こ 君ニムツノ白ハウノ松木ノ

こ 松麓ニ契ト云フ

昔 夫婦ノ辱

大 大和物流云 昔津國ニ佳女

今 今独ハ和泉ノ國ノ人也 姓ハ千又ト云云此男共年齒顔貌人ノ

ホ ホトナシ唯同ハカリワルニサシニサクニコソアハセメト思ニ心サシノ

ホ ホトナシ唯同ハカリワルニサシニサクニコソアハセメト思ニ心サシノ

ホ ホトナシ唯同ハカリワルニサシニサクニコソアハセメト思ニ心サシノ

ホ ホトナシ唯同ハカリワルニサシニサクニコソアハセメト思ニ心サシノ



山づらのかきものぞりじりけりげよじりりきと  
物をしりき

或本ニアリト云モノアリ 行騰 スコモキアヲナニモテコウツハリニ  
泥障 ムカハキカケテアスムコノキニ

あけはそびけりきをみりてついでに  
あけはそびけりきをみりてついでに

あけはそびけりきをみりてついでに  
あけはそびけりきをみりてついでに

屠所ハ羊歩之事也 唐玉ニハ羊牛ヲ飼置而食時ニ望  
テ屠所ハ相具シテ行殺ス也 歩々ニ隨テ死地ニ近付  
是ヲ每常ニ譬也

空野ハワラミツモナクサメツ 今曰スキハニシ物ヲ夢ニテモ  
今ツエヲハカト君カトシ

あけはそびけりきをみりてついでに  
あけはそびけりきをみりてついでに

解夢書曰 夢見病人必死  
心ニシリトハム子ハニル同也 漢書高記下 曰上欲宿心動

河海抄卷第廿

第云十五 蜻蛉 卷名

正六位上 物語博士源惟良撰  
アリトモテ手ニハトラシスニレハニタ  
行ニモシラスキエシカテロク

かしこみ人ごめをを  
物産の娘を人ごめをを

あしどろとつらつらと  
あしどろとつらつらと

古物語ノ今世ニ傳ハラス多シ如然物ナリ  
行成 世中ノウキタヒコトニ身ヲナケル  
フカキ谷コソクナリナメ

あしどろとつらつらと  
あしどろとつらつらと

あしどろとつらつらと  
あしどろとつらつらと

あしどろとつらつらと  
あしどろとつらつらと

選三十三

宋玉为屈原作招魂辞曰帝告平陽曰有人在下我欲







まづそいゝるるやまよまどりれつらん

班犀帯 束帯

九倍 日本記

六十僧六波羅密若六道ニ當テ行ハク

万葉十五ニ悲別贈答六籍作挽哥

そゆしあふあかぶらも  
新羅ハカイニカニル家ユキノ  
シメユカムタツキニ思カ子ツモ

仁徳天皇十二年甲戌五月此歳額田大中  
彦皇子獵于關鷄時皇子上望之瞻野中有物其形  
如盧仍遣使者令視還來之曰窟也自喚關鷄稻置大山主問  
之曰有其野中者何窟矣答之曰氷室也皇子曰其藏如  
何為矣用焉曰掘上丈餘以草蓋其上敷敷茅萩取氷

淨舟ノ君ノイラ大將思歎タルニテ一品宮ノ小宰相君我身ニカハタフハト云ルナリ  
若赤古哥ニ有カ可動

早下 千談

以置其上既經夏月而不消其用之即當熱月漬氷酒以用

皇子則將來其氷獻御所天皇歡之自是以後冬當敷  
冬必藏氷至春分散氷也

如生 長恨歌

惟子ヲ着給ト見ヘタリ

西宮左大臣六月之比丁子漆

古物語歟水原抄云

遠君云或亦十君云此帖行成卿自筆本ヲ見侍方ハ芥

川ノ中將トナリ惠心僧都ノ勸女往生文ト云物ニイニメキ中將

長弁侍從伏見ノ翁ナト云古物語有ト云リ左様ノ類也

ろもむつま〜〜思ひ〜〜あへさ

ソキモ子カキテハヨリ立楨柱

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜

ソモムツニヤ〜



春空ニ飛少虫ツイハル也 軒端ニ遊フ蜻蛉トハ是也

第卅六 手習 卷名

浮舟君身ヲナケシ泪ノ川ノハハキ瀬ニトアリシヨリ手習ト云  
 詞卷ノ中ニ四ヶ所アリ野山ノ雪ヲ詠テモト有所ニモ例ノナシ  
 サメノテナラヒコナラハ隙ニ仕給上リ仍号手習君ト云  
 其れより横川ヨコガハのそとびのひそくたつと人  
 下らんやそらみまればカキづりのいのちをたたりそり  
 ふうふうとてうつせよまろくでけり北叡山三塔東塔  
 西塔横川 十三カシ僧都ト惠心僧都ト斐欣遁世後  
 隱居横川谷仍号横川僧都ト  
 傳記曰件僧都者大和國葛城下郡人父者占部正親其

母清原氏也母夢天人下授一男三女其畢受後只人共可成聖  
 欣思之其後彼母令祈請子息於觀音長谷寺之所夢中僧  
 来令与一珠見畢不久懷妊生男子即惠心僧都是也成人之  
 後有事縁登山出家受戒修學業既成論義斐擇聞世被  
 召公請種々縁畢為寂初得物之間為令稅令送其物於母之許母  
 返報云吾所送之物敢不悅所願者偏道世修道之營也云云  
 即隨母命止諸縁隱居横川谷修淨土之業寬弘元年五月廿四日  
 任權大僧都同日辭表一期所修善根者念佛二十俱眠反轉讀  
 大乘經五万五千百卷奉念阿彌陀大咒百万反尊勝陀羅尼三  
 十万反千手陀羅尼七十万反佛眼不動光明真言不過洋進  
 亦所造書籍雖多其中往生要集三卷一乘要要三卷勝宋朝  
 明聖等見往生要集權化所作稱羨讚嘆寬弘二年十二月  
 十日朝飲食如常淨身口舌所病神佛御千糸念佛數百  
 及如眠終給年七十六而已妹尼安養居事歛惠心僧都妹也  
 長谷寺ノ願モ相似タリ

大和物語云 何計ヲカクモアラス尋常トナシ云々 横川ト云  
所モアルナリケリ

横川にせしをてまへ山にこもりればいつくもかこひて思ひたれど  
つぎりれぬるものならぬとてかこひてかこひとてぬるる事

恵心僧都妹 母養庄 終焉之時 者必可來會之由 僧都誓約云  
而 僧都于日山 山絶之間 自居 許示 云云 老病少 憑羅 成畢 今一  
度 對面 大切云 雖 然限日 數山 就難 出洛 可 然者 乘輿 可來會  
西坂 本之由 返答 畢於下 松邊 相待之所 輿已到來 僧都進寄  
塞 簾見之 所居上 既逝去 相共輿到 清義 修覺院 房 清義先  
心誼七卷 讀之 次以 火界咒 令加持 惠心 亦奉念 地藏 則蘇生云  
古事談

あづみしでしの中みしぞんありしてかぎりしりぐを

加持者佛三密也 持者行者三業也 彼三密ヲ此三業ニ  
持スルヲ加持ト云也

かづらぎみささぐりて 古人又云長神也 然中神歟 天一中神故也  
第木卷前助年十七

加朱雀院の山よりあづみしてうしろの院といひす 平等院建立

以前有号宇治院所見可引勘也

ささぐりぬささぐりぬささぐりぬささぐりぬささぐりぬささぐりぬ

かづらぎみささぐりて 退也 即也 譬ハ身モ

聖躰ノ心欽唐人ノ詩モ 髪如竹ト作レリ同心ナリ

ささぐりぬささぐりぬささぐりぬささぐりぬささぐりぬささぐりぬ

水鏡云 欽明天皇 沙宇 羨濃國 有男 顔ヨキ 女ヲ求テ  
モノハニカリシ 野中ニ 女ニアヒ 侍ニキ 彼ヲ妻ニシテ 男子一人 生リ  
カクテ 月日 シス クスニ 家ニ アん 犬 十一月 十九日 ニ子ヲウシニテ  
オトナシク 成タルニ カレ 女ヲ 見 度ニ ホエシカレ 六女イミシク オチテ  
男ニラ ロロト云ケレト キカガリキ 此女 呆子シラケン 女ハニセノクハセシ  
トテ カウノウスノ 屋ニ入ニキ 其時 此犬 走來テ 妻ノ 女ヲクハシト  
ス女又 タヘスシテ 野干ニ 成テニガキノウハニラカリテ オチケリ  
帝王系圖云 同濟字 參河國 成人 妻ト云々 古塚有 狐妖

且老化為婦人顔色好頭鬢雲髮一面愛紐大尾曳作  
 長紅裳徐行傍荒村路日欲没時人靜所或或或或或  
 白氏文集

樹神木神魑魅魍魎空谷響大日經 左傳注

魑魅山林異氣所生為木客者也欺之嘲哂之心也亦詐

やまひいこころふるもいさめをかし

ツレモキ人ヲコトテ山ヒコノ  
コトハスルニテナケキツル哉

首とてなんてもいさめをかし

文殊樓目益鬼事欽日記二号目鬼下リ

幸

いりさきまよを

詐カラテ也ユツ上ニツキテイテ丸詞之

神のいれぬに経うついはれ

神分經二

あやさきまよを

不用

人乃んまよをいさめをかし

假色迷人猶若是真色迷人應過此 白氏文集 古塚狐

これいさめをかし

葬送 雜事

いさめをかし

伊世物語云小野二

コトテ先ニ比叡山ノ麓ナレハ雪イトカシ小野ハ大原山ナリ

比叡坂本ト云也小野郷内大原村也布薩下

大原ニ住給云時人号小野皇太后宮也

けしこころせきとね 邪気祈禱ニ護摩壇焼カキ

いさめをかし

命業盡 經文

いさめをかし

ヨリサキナリ

いさめをかし

端正者自慈辱中来 大集經

いさめをかし

金槌法師 或識

いさめをかし

讀戒ノ中ニ兼強罪ハ

ナラワラ止トイヘハ細微罪ハ悉ニ難止モノ也五戒八戒

等ハ兼強ニ二百五十戒五百戒菩薩三聚戒十每盡戒



有るはラミテイミシノスキモノシハサマトテ

ことしひきまのそとちりりしし

略省

りかかけたるりしりるれん 山カタケテスムイホトチヨモヨナリ

物なむぐい後河れみみみををぶらこわけけて非うそおし

流し行我ハミクワト成ヌヒ君シアラシト成テト、モノ

ことしとして 上東門院ノウハハニイヌキト云物アリト栄花物

語ニハタリ此物語之中ニモイヌキナキマテキナトテ

アリキハ公心飲赤野宮哥合判源順作者ニモサエモキ

ナトアリ見順家集

昔のんしみやこもうににもあし 名ニシヤイハカコトハシマコ鳥

かまわやうんゆるるまぞしこと ナテシコノ哥

けふみかふづこととて 略省

人々すとらんめどりゆりちもあしつものこをれ物ゆりれん

水飯 蓮子 遊仙蓮子数盤當冷調 和枝一画試春衫文集

九

酒釵送盆推蓮子燭泪報 盤異世蒲菊 一説云

蓮子遊仙 水飯續後應之後 盆ラエテ出シケル飲菓子中ニ

藕實ラ語事 イタク先蹤ナキ飲亦云夏ノ會ナレハ藕實モ

ナカレハハキニアラス盆ラハタコトイハシモアテリニ上予メキル飲

ワヤこがづみをぶらに ソツタニチヲカタニニ

しりちつとしりびりあひあひるるる 檜皮色袴也

藻芳トフシカ子ニテ染免物也出家之人多分著之飲

あふむをめてこけいふんとくらぎしひていしりいりうらうら

ゆりしをふりすふ 後ニモ何白之甘言也 今ノ物云キハニキ世ニ

あ中細まじりかんわりりりり 鬚黒大臣息小野尻ノ聲ノ中将唯今ハ

亦此人ノ聲君タニマ

いまのしりいり 略也

あだり力 承暦哥合ニ嗟 蹴野ヲ過テアタシノ迄行ケンモ

アチキナシト云リ是名所飲亦野宮哥合判云アタシノハ

名高カハ子ハニマアラン有祈シレハ人少シト云ク

清輔朝臣抄云名所ケニ三八とレ尺唯ワタルコトニヨセテスレ  
欣アガシ心ナト云賦歎

志のわりの心 能因号枕ニセラシメト云  
八月十日余日ありてなつづりかほりてふり

イハセニ秋ギシキ約十ヘテ  
小鷹カリニセテヤワカシ  
集云類コタカボリ 新點ハ小鷹狩ヲイヘトアリ 貫之

尼忍すらふの山 花ニテ折シトハハ女節花  
うたあるまじ ウタニハサシノ名テ有

秋を思ひぬ ナニ見給ト云シ哥ノ心也  
志のわかぬ 山御ハ秋コソコトニワヒシケレ

みえぬらば 鹿ノナク子ニ日ヲサシツツ  
あたらを モトクモ何ヲナト云ト女  
かうとら ナニモ  
いづくん ナニモ

通稱タルセクトコ同響也亦古今作者ニモ屎トテアリ  
貫之童名ヲ内教坊阿古屎ト云リ當時鳥士ノ下女ノ中ニ  
何クスナト云名アリ云

いぞぞれ 嗟々俗人耳好今不好所以北窓琴日クニ生塵土  
いぞぞれ 嗟々俗人耳好今不好所以北窓琴日クニ生塵土

かき 命名心叶フ物ナハ何カ別レノ悲シカウニシ  
いづらん 命名心叶フ物ナハ何カ別レノ悲シカウニシ

又 肥前塚 福良利法名寛連子圍碁  
き 好幸也  
ま 好幸也

稟書云私云法名ニ三字ヲツクテ 公家様ニ今モアリ 四过宮  
真人ニ成給テ 千時従二位中納言 春屋國師ニ法名銜申アリ云ニ





形コソミ山カケノ朽木ナシ

君コトドモミコトト此多ク人

兵部卿宮ノ峯ノ雪清ノ

氷ト有シ事也

わッかを切ウをウウコト入テ

實方朝臣銀ノ篋ニ若菜

ヲ入テ獻圖融院有

表デシコトコトコト然ルモ月ヤラ又春ヤ昔ノ春ヤ又

あッばアコト白ハ此モコトコトコトアカサリシ君カ白ヒノコトコト

ほッビコトコトコトコトコトコト今朝ハ折ツ

あッコトコトコトコトコトコトコト出家

を中ノ一ノコトコトコトコトコトコトコトコトコトコトコトコト

大臣一上ラア所ト云或亦一人ト云也

宿徳

右近將監也

近曾 オトハコトコトコトコトコトコトコトコトコト

万葉ニオトハ

イノサイツトヤリ

イノサイツトヤリ

月コトコトコトコトコトコトコトコトコトコトコトコト

六赤日ノ始也其上茶師縁日ナハ云ナリ

根本中堂 延暦七年

傳教大師之建立也本尊サ茶師如来ハ大師造立也

其後梵天帝釈四天王六忠仁公日光月光菩薩ノ宇治

開白十二神將ハ御堂開白被造制之

第卅七

夢浮橋

此物語之卷と相壹ヨリ手習ニ至迄或詞ノ字ヲ取テ名付或  
 哥心ヲ以テ名トセリ爰此卷ヲ夢浮橋ト題スル一詞ニモ  
 二ハス哥ニモナシ古来ノ不審也凡夢浮橋ト續ケ名ト是ヨ  
 始リ夢ノ渡浮橋ト有哥ニツキテイハル歟或説曰手習君  
 薰大将ノフミヲミルニテモナクテカハシタルニヨリテフミ見又カユヘニ  
 浮橋ト云歟此卷ニ夢ト云一五ヶ所ナリ亦大将哥ニ思又山  
 ニフミヨフカトトフンモ一トフハタトハ後也サタカナラ又心ニヨセテ夢ト  
 イハル歟云此其淺薄也彼ノフミヲヒラキミテ有シナカフノ御  
 手ニテカミノカサト例ノ世ツカ又ニテシヒタルト云リ大方此物語ノカ  
 コリ全ク色ニラケリ言ヲカカルニアラス唯毎常迅速ノユトナリ  
 シアツハ盛者必衰ノ趣ヲシラシメシカタメ也今ノ題目ヲ案ス  
 ニニツ夢ト云ハムナキ心也有無ノ諸法何レモ夢ニ非スト云一ト  
 涅槃經ニ生死毎常猶如昨夢ト説大圓覺經曰始知  
 衆生本來成佛生死涅槃猶如昨夢善男子如昨夢故

甚

當知生死及与涅槃每起一每滅每來每去唯議論ニ未得  
 真覺常處恒夢中故佛説為生死長夜トアリ内外ノ經書ニ此  
 夢ニ分テ様々ノ義アリシラス一上アラス香山居士ノ詞ニ言下ニ忘  
 言一時ニ畢夢中ニ説夢兩重虚ト有モ此心ニマ次ニ浮橋ト云ハ  
 伊特諾伊特用尊天浮橋之上ニメ共為夫婦仕給テ  
 陰陽ヲ定メ洲國ヲ生セシ事ハ我國之始也是皆男女ナカ  
 ウシヨリ食リ彼漢家之風ヲ移俗ヲ易詩三百篇之中ニ關雎  
 麟趾化ヨリ鶴巢駟虞章ニ至迄此夫婦之道ヲモテ周公之  
 風ヲノハタリ先夫婦有テ万物ヲ生ル故也關雎后妃之徳也  
 風之始也故詩序云所以風化天下而正夫婦也故用之  
 御人焉用之邦國焉トイハル去ハ浮橋ハ生死ノ終ヲ煩  
 惱之根元也夢トハ世間出世ノ法皆如幻如夢也ト云心也  
 毎相之理也是菩提也煩惱即菩提生死即涅槃之義  
 此名ニアラハレタリ作者已證之分既爰ニ明成者歟諸經之  
 説相皆序正流通之三段アリ流通分ニ至テハ題名ヲ

顯ス常途之義也今ノ物語七終卷ヲ夢浮橋ト号ス此  
卷之別名トシテ非ス一部之可成惣名譬ハ光源氏物語ト

云カコトシ或ハ夢浮橋物語中世七法師ト云ハキヤ亦此物語ヲ  
光源氏ト名付卷箇數ヲ第卅七帖ニワカチ定ルモ心城卅七尊之  
光ヲ思ヨクハスニ一名法師ノリノシトタツ又ル道ヲシルヘニテ  
思ハ山ニフミヨラナリ

山ノありしきいせき幣師比叡山

をめぐりてるぞん物しほり比叡山

をのりてしきいせき幣師比叡山

をのりてしきいせき幣師比叡山

をのりてしきいせき幣師比叡山

をのりてしきいせき幣師比叡山

可葉耳ニサヤク心ナリ

昔の物語ニハたゞのよきとてしるせん人ハたゞとてしる

定家卿云ウツホリ物也云云可動也タトハ殯殿也見葬礼  
記式

天雅彦薨逝乃後下照姫天ノ喪屋ヲ作ラ殯スト云リ亦廿五

續日本記云大宝二年辛酉日殯西殿太上天皇  
ナトアリ或亦  
持統崩

魂殿共云歎礼記ハ殯宮ト云リ聖德太子令入定給所ヲ夢殿

トイハルモ同事也此事若呂后高祖  
后也歎彼后ノ山陵ヲ

數百年之後赤眉ノ黨宝ヲトハルタニ掘起ニ死人形美麗ニ

如存仍赤眉ノ黨是ニテ千人祀之後漢書  
唐土ニハ死人之口

五ヲ含シメテ埋又レ六年ヲフレ形像不爛壞云云我朝ニモ上古ノ

帝崩給時玉ヲ奉含セリ

念仏をいんじもてせしめん 一心不乱 阿弥陀佛

天狗 天狗狀如奔星黃帝伐蚩尤之時以正月五日

伐斬之其首者上ヲ天狗其身伏而成蛇靈本朝月令

たまげて来るのてまうてれちし月ツキもりいひを人たてて

此三月訓欣音欣料見ス但何レモイタクワトカヒ先ニキ也

年習ノ君ウセニ三月ノイ也浮舟ノ卷ニ兵部卿宮此月

晦比ニ向ヒト仕給トアリ三月晦日大将ハ卯月ノ十日トシ



是亦同風情也一説云ハカナル谷ノ軒端ニアタリテ近ク  
見ル心欣軒端ノ梅松ナトイフモ軒ニ木ヲ植タルハナ  
ケレト軒近キ心也

引干 海草也

いさぼ 饗飯ヲミナルト云日本記ニ主ト云所ニ先飯ト

イリ諸社祭ニ上御飯ヲ干時ニナルシカレト化スル也

あこがうとめいしもの 吾子日本記ニ女ヲハ姉ヲモ妹ト云  
男ヲハ兄ヲモセウト云也

それゆゑなりとありのいふゆゑと云

浄思

いさよげと志ありありの

羞是 白氏文集

いさよげと志ありありの

いさよげと志ありありの 一日のすゝものくぐり

心地観經曰若善男子若善女人念阿耨多羅三藐三菩提

廿七

提心一日一夜出家修道二百方却不得惡趣常生善所  
受勝妙樂遇善知識永不退轉得值諸佛受菩提

悉

外様

廿八章ツレト也一説云サキ来ツレト也

驚破

顯證人 亦見所人

あつとあつとあつとあつと トリカス物ニカナヤ世中ヲ有シテカラク我身ト思ハシ

みよとみよとみよとみよと 心フカキ人ヲハツミヘカミキト

云ナリ去ハツミサレトハ心アサキヨシナリ

あまれとあまれとあまれとあまれと 落置也玉鬘卷ニオトシアフサトアリ

亦總角卷ニモステカクオトシヨキタテニツリケトアリ此心也

四辻宮大納言家申出中書御本永和二年自  
益冬比今永和第五到季春四日書寫一筆訖

永和五年三月十日 散位基重在判

此の文を所のりて多るれども流て是のりて

康曆第二季春後八日重三申出御本見合畢讀書

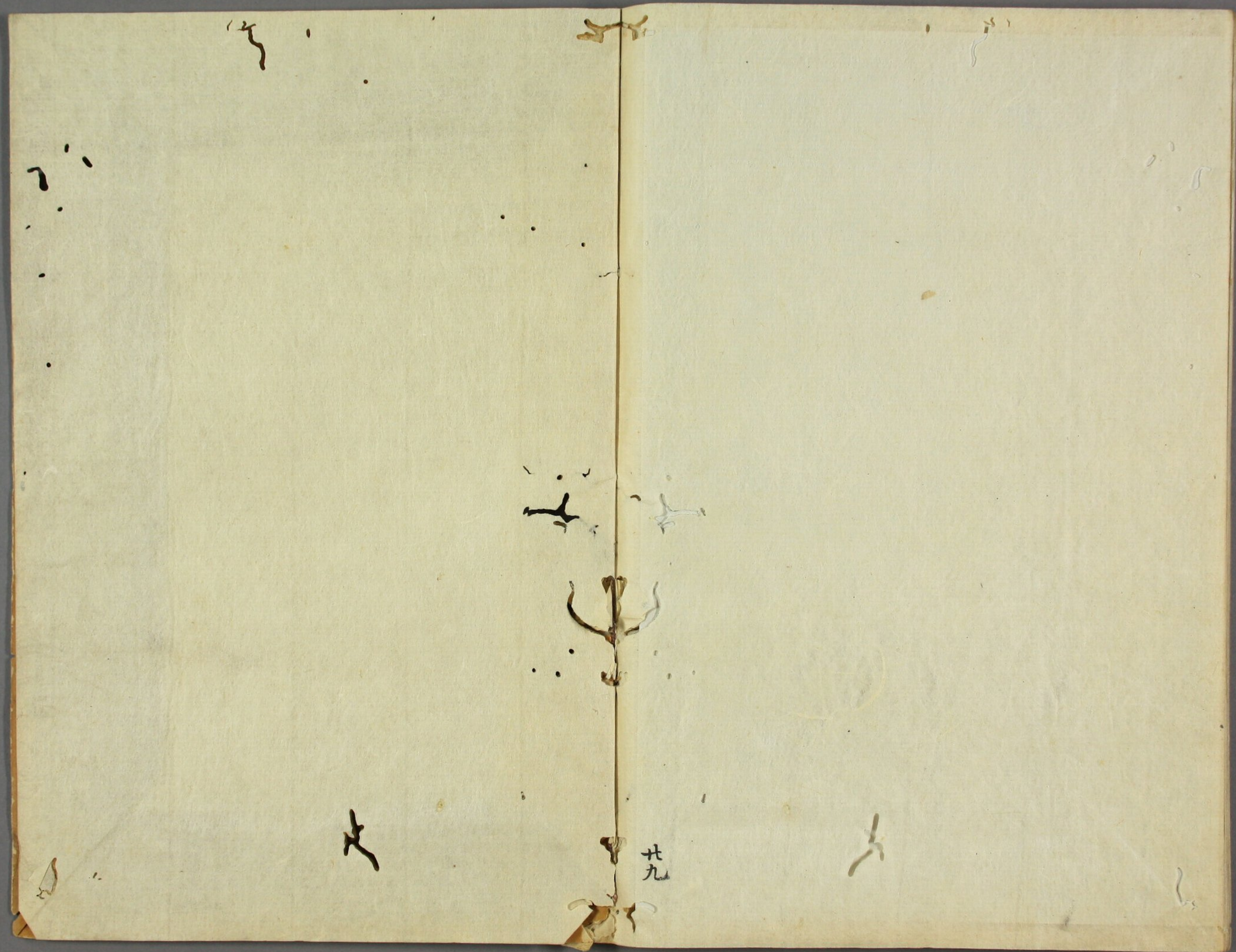
雖非器依志切自基重家此一本所令相傳也

應永第十自仲春比今到益冬比自書寫一筆訖

不可出私箱也 師阿

此の文を所のりて多るれども流て是のりて

此一句恥後見心畢



九

九

九

九

九

九



